

空と自転車と

仲川 浩世

2024 年の夏は、公私ともに様々な方面を訪問する機会に恵まれた。その際、常に興味を持ち、惹きつけられるのが、空の色である。日本国内とはいえ、地域が異なるだけでも、空の情景は様々な言葉で表される。時間帯にもよるが、旅をする楽しみの一つが空を眺めることである。特に気象予報士の資格を持っているとか、地理的な専門知識に秀でているというわけでもない。ただ、見知らぬ土地で真っ青、あるいは真っ赤な夕日を眺めていると、日常の雑事が取るに足らないことのように思える。

このエッセイを読まれた方が空の話とは、何とくだらないと思われたいことを願うばかりである。どのような分野の学びでも、自ら取り組み、実体験を反芻して知識を深めていくことが重要ではないかと思う。その経験の中にも、師（友人）と仰ぐべき方々との出逢いも含まれているのかもしれない。幸い、尊敬する方々に恵まれたため、私はこれまで学校という社会で働いてこられた。

さらに、人生の転機となるときには、周囲からの助言によって、道が開けるという経験も積み重ねてきた。簡単に言えば、ふとしたきっかけから、自分の行動パターンや生活習慣が改善されるのである。その一例が、つい最近、職場の先輩からのアドバイスである「自転車に乗ってみられたらどうですか」である。

購入して以来、ほとんど乗っておらず、足を痛めてからは、物置台となっていた。特に、酷暑の激しいこの夏は、徒歩での移動、食品の買い出しに困り果てていた。そこで、アドバイスをいただいた後、試しに乗ってみようとしたが、タイヤはパンク状態。近所の自転車屋さんへ慌てて、「空気を入れてください！」と持ち込んだところ、「まだ寿命の半年も経っていないのに」と呆れられてしまった。そして、いざ乗ってみると、その軽快なこと。驚くばかりである。秋学期が始まり、今は通勤にも愛用している。だが、いつまで続くやら・・・秋風が吹いている間は、気分転換には最適であるが、木枯らしが吹く頃には、寒さに耐えながら自転車を乗りこなしているかどうか、何とも言えない。

自転車を乗りながら、ふと見上げた時の空の色は、日々、時間によって異なる。それは自分の気持ちを表現しているのかもしれない。生活の中で感じる喜びや楽しみ、時には、辛いことも含めて、全てが空の色に反映されている。些細なことであるが、自転車に乗り

ながら、空を見上げることができる恵まれた環境に対して、改めて感謝すべきではないか
と感じた。

(なかがわ・ひろよ 教授)
